

秋田県立大学「人類の持続可能な発展に資する科学技術」
「苗」研究のエントリーシート

研究テーマ	社会情動的選択性から見た高齢者のソーシャルネットワーク		
研究代表者	渡部 諭	役職	教授
フリガナ	ワタナベ サトシ	学位	教育学修士
学科等	総合科学教育研究センター	Eメール	watanabe314@akita-pu.ac.jp
主な共同研究者(学内)			
主な共同研究者(学外)	澁谷泰秀（青森大学社会学部）、小久保温（青森大学ソフトウェア情報学部）、吉村治正（奈良大学社会学部）		
研究の内容			
<p>世界的な規模の高齢化とわが国における超高齢社会の出現によって高齢者対象の研究の必要性が高まる中で、高齢者の認知機能に関する理論が求められている。過去には、離脱理論・活動理論・継続理論が提唱されたが、現在最も注目されている理論は社会情動的選択性理論（Socioemotional Selectivity Theory, 以下SST）（Carstensen, Isaacowitz and Charles, 1999）である。この理論が先行理論と大きく異なる点は、高齢者の認知や行動の特徴を年齢の関数ではなく、自分の人生に残された時間がどの程度であるかの認識に依存するとした点である。人生の残り時間がまだ長いと感じる若年者は新しい知識を求める知識志向であるのに対して、人生の残り時間が少ないと感じる高齢者は情動的な満足を重視する情動安定志向であると主張する。</p> <p>われわれはこれまで、高齢者の意思決定の研究（平成19・20年度科研費採択課題、Watanabe and Shibutani, 2010）や積極性効果の研究（平成21・22年度吉田秀雄記念事業財団研究助成採択課題）を行ってきたが、いずれもSSTからの予想と一致する結果を得ている。そして現在はSSTやリスク志向性と生活の質との関係に関する研究（平成23年度科研費採択課題）を行っている。本研究課題はこのようなSSTに関する研究の一環として、これまでわれわれが取り上げてこなかった高齢者のソーシャルネットワークという課題に取り組むものである。SSTによれば、高齢者は残りの人生における情動的な安定性を重視するために、家族や親族などのネットワークの中でも中心的なメンバーとの関係に絞る傾向があるとする一貫した結果が得られている。ところが、この報告に対してはこれと異なる結果がかなりの数報告されている。本研究課題はこのテーマに関する検証を行う。</p> <p>上述のようなSSTからの高齢者のソーシャルネットワークに関する結果は実はネットワーク分析（鈴木、2001）の用語で換言すると次の3点にまとめられる。ネットワーク構成の変化（中心的及び周辺的なネットワークメンバーが混在する状態から中心的なメンバーのみの状態へ）・ネットワークサイズの減少・ネットワーク密度の減少である。SSTによる一連の高齢者のネットワーク研究をこのように高齢者のソーシャルネットワーク分析として捉える立場（Carstensenらの研究姿勢とは異なる）が考えられ、本研究課題はこの立場に立って研究を進める。</p> <p>Carstensen, L. L., Isaacowitz, D. M. and Charles, S. T. 1999 Taking time seriously A theory of socioemotional selectivity. <i>American Psychologist</i>, 54, 165-181.</p> <p>鈴木努 2001 ネットワーク分析 共立出版</p> <p>Watanabe, S. and Shibutani, H. 2010 Aging and decision making. <i>Japanese Psychological Research</i>, 52, 163-174.</p> <p>（平成24年度学術研究助成基金助成金採択課題）</p>			

研究の独自性・アピール点

わが国における高齢者のソーシャルネットワークの最新の研究はわれわれが知る限り斉藤雅茂(2008)であるが、本研究はこれ以後のデータを提供することにより、SSTがベースとした高齢者とは異なる現代日本における高齢者のソーシャルネットワークの最新事情を明らかにすることが期待でき、主に欧米でのデータに基づいて構成されてきたSSTの説明力の検証を行うことができる。また、SSTと高齢者のソーシャルネットワーク研究という心理学で発展してきた研究分野に対して、ネットワーク分析という社会学で発展してきた方法論を援用することによって、心理学者と社会学者の共同作業として研究を進める点是他に見られない。 斉藤雅茂 2008 高齢者の社会的ネットワークの経年的変化. 老年社会科学 20(4) 516-525

期待される成果・波及効果

近年高齢者による犯罪率の増加の原因を、高齢期の人間関係の疎遠さに求める傾向があるが、高齢者のソーシャルネットワークの実情がどの程度明らかにされているか不明である。それに対して、わが国の高齢者のソーシャルネットワークの実態を明らかにすることを本研究課題が担うものと思われる。さらに、東北地方における高齢者の自殺率の高さ(宮城県を除く)についても、その原因を高齢者の人間関係に帰着させる向きがあるがその妥当性を検証するための基礎データを与える上でも貢献できる。

関連する主な業績

Watanabe, S. and Shibutani, H. 2010 Aging and decision making. Japanese Psychological Research, 52, 163-174.

キーワード

社会情動的選択性、高齢者、ソーシャルネットワーク